子供から大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を　1996年9月1日発行　［隔月発行］

文化高知

'96年9月　NO.73

「鈴木主水」　絵 金（高知県立美術館蔵）

(財) 高知市文化振興事業団

私の施設訪問

笹川　耀子

〝分かってもらえるだろうか〟と少々危惧を感じながら、挨拶がわりに下手な手品をやってみた。すると、出て来た小さな赤いモールの花を両手で包みこむようにして、前に座っていた初老の患者さんが「きれいな花やね――」とつぶやいた。瞬間、私の胸に熱い風が吹きこみ、目頭があつくなった。

ここはある病院の痴呆病棟の一室で、この日催される誕生会の出し物に〝手遊び〟が計画され、一つやってみてほしいとの声がかかり、出向いて来たのである。老人保健施設には毎月伺って色々の取り組みをしているが、病院は初めてだし、どんなことをすれば良いのか見当もつかないままあれこれ用意して来た。

最初に、病棟への出入口に鍵が掛けられていることにショックを受け、胸がつまり、とても私の手には負えないだろうと不安いっぱいになってしまった。それが「きれいな花やね――」の一言でいっぺんにその部屋全体の空気と一つになってしまった。分かるんだ。美しいということ、花ということ、それなら一緒に歌って見よう、手を叩いて見よう。前の方の人も後ろの方の人も部屋中の人が昔からの馴染みの人に思えて、大きな声で「かごめかごめ」を歌い、「夕やけこやけ」の手拍子を楽しみ、「ソーラン」では座ったままの体操にも取り組んでもらった。出来ても出来なくても、私が見た限りでは、どの顔もにこやかで晴ればれとして見えた。またたく間に約束の三十分が過ぎ、「また来るからね」と再会を約して別れた。これだけの間に彼女達と私の間に太い糸が強く結ばれてしまったのだ。すぐ忘れられてもいい。美しい物を美しいと感じたり、楽しいことを喜ぶ時間が少しでも増えていくことがとても大切だと思うし、その手伝いなら私にも出来るだろうと思ったからだ。

〝ボランティア〟を辞書で引くと「自発的に障害者や老人に対する奉仕や社会福祉活動を行う人々」とある。

だが私の場合は、そういった意味の訪問ではない。もしかしたらと覚悟を決めて受けた手術から、生命をもらって退院した。その後たまたま仕事場で手伝った〝印刷物のコピーをする〟という簡単な作業で、頭の中に小さな灯がともった。こんな身体でも、まだ他人の役に立つことが出来るんだ。暗い囲いの中から世の中を垣間見ているような精神状態の中で、その小さな灯が、友人を誘って盲学校へ、子鹿園へ、老人施設へと足を向けさせてくれた。

こうして始まった施設通いは、奉仕どころか私の心をどんどん癒し元気づけてくれている。だから私流で言えば、行政の方々も施設づくりやケアへの配慮もさることながら、もう少し元気印の高齢者を増やす方へ力を入れて下されば……と思ってしまう。また、たくさんの方々が施設を利用し、また施設自体が次々とオープンしている現実の中では、私共のようないわゆるボランティアへのニーズも増えてきている訳だから、行政側がこうしたボランティアグループの点の活動を線につなげて、情報交換やアドバイス、指導などに乗り出して下されば、と思う。そうなれば軌道修正の連続といった私共の取り組みも、もしかしたら積み重ねを通して実りあるものになるのではないか？　等と思ってみるのである。

（学校法人高知芸術学園理事長）

マルチメディア時代の情報

森沢　広明

三方を四国山脈に囲まれ、前には太平洋が広がっている高知。その閉鎖的ともいえる地形のせいなのか土佐っ子は新しい情報にどん欲であるように感じます。来年には三つめの民放テレビ局が高知で放送を開始しますが、そんな土佐っ子の旺盛な知識欲がそれを導いたのでしょう。

さて、放送と言えば、世はマルチメディアの発展による超高度情報社会への変革を迎えています。その中の事件の一つが、黒船の来襲と騒がれた、オーストラリアのメディア王、ルパート・マードック氏によるテレビ朝日株の買収話です。

マードック氏は、日本の放送事業のノウハウと膨大なソフト資産を吸収することによってデジタル衛星放送による多チャンネル事業への参入を画策中といわれています。本格的な多チャンネル時代の幕が彼の手により切って落とされるのかもしれないのです。

マルチメディアの一翼である多チャンネル化への試みは、いままでもケーブルテレビなどでされてきました。しかし、ソフト不足はどうしようもなく、難視聴地域向け放送という形からは脱皮できずに、欧米のように広くは普及しませんでした。しかし今回の場合、最大のポイントであるソフトの供給に関して、マードック氏の所有する映画会社が持つ莫大な資産とテレビ朝日の持つ全国規模のニュースネットワークを活用することで魅力ある番組編成が出来るといわれています。今回の多チャンネル化が成功すれば、今までとはまるで異質の情報が視聴者の手元に届くことになるでしょう。

従来のテレビ放送は、不特定多数の視聴者に向けて発信するものゆえ、多岐にわたる要求に対し平均的にまとめた情報である必要がありました。例えば、ニュース番組ならば、事件、事故からスポーツニュースに街角の話題まで同等に浅く広く情報を提供してきました。しかし、チャンネルが大きく増せば、事件専門チャンネルやスポーツ専門チャンネルが登場し、より専門的な情報が、それを知りたい視聴者へ向けて発信されることとなります。また、マードック氏のパートナーがコンピュータ業界の雄、ソフトバンクであることにも注目しなければなりません。近年、パソコンはインターネットブームを背景にマルチメディア端末としての役割も持たされ、しかも低価格化とウィンドウズ95などによる操作の簡略化によって一般家庭に爆発的に浸透してきています。世界中を一つに繋いでいるインターネット上で展開されている幾千万ものホームページでは、様々な分野の企業を始め、お年寄りから子供までもが、種々雑多で好き勝手な情報を全世界に向けてリアルタイムに発信しています。インターネットは新しい情報メディアとして急速に発展をし、視聴者に色とりどりの情報を提供しているのですが、法などの規制がほとんど存在しないため、中には決して正しいとは言えない情報や、有害な情報さえも含まれているのも事実です。

マルチメディアの時代。これから先、いつでもどこでも必要とする情報が簡単に手に入るようになるでしょう。しかしそれは同時に必要としない情報も飛び込んで来ることを意味します。現在でも高度情報社会は、間違った情報や偏った情報、誤った伝播によって、犯罪の低年齢化、薬物汚染、ネットワーク犯罪などの社会問題を生んでいます。

結局は、情報を得た視聴者がそれぞれに必要性を見極め、取捨選択が出来る眼を養うのが超高度情報社会で生き残っていく手段といえます。さもないと情報という大きなうねりに巻き込まれ、つぶされないとも限りません。

高知にも無数の情報が、ありとあらゆる場所から時間を超えて怒濤のように押し寄せて、様々な分野に変化をもたらすでしょう。しかし、どん欲に吸収するだけでなく、時には養った目で冷静に情報を解析していくことによって、情報都市として高知は更に発展していくことでしょう。

（ウッドオフィスグループ代表）

多様なる「絵金」の世界

川島　郁子

平成七年六月、絵金保存調査委員会は発足しました。絵師金蔵―「絵金」が芝居絵を始めた時代からいうと百年以上を経て、年に一度出される程度であれ、保存的見地から考えると危機的な状況にきていることから、基礎資料を作るための委員会発足でした。

調査は、絵金及びその弟子、そして芝居絵と対象を広げて行いました。それは「絵金」という呼称が絵師の通称だけでなく、土佐の芝居絵と同義語として受け入れられている点、また、芝居絵という画題と形態自体が高知独特のものとしてどの様な展開がなされたか、その資料を得るという点にあります。

実際の調査は、書籍などで紹介されている作品を始めとして、調査票による県下の教育委員会の照会や個人から情報を得て実施されました。調査先は百カ所を越え、点数は二千二百を越えています。いわゆる、芝居絵屏風は二百点ほど、全体の点数の約八割は白描が占めています。その他のものでは、掛軸、絵馬、祭礼の台提灯の脇や下部にはめ込まれる小襖、「えんま」とよばれる絵馬提灯、横幟、枠張、巻子、襖、陶磁器、雛段用の小襖、枕屏風など多岐にわたります。

新聞紙上でこの報告がされたとき、「絵金がそんなにあるのか」といった問い合わせが県教育委員会の文化財保護室に寄せられたと聞きます。調査中も、所蔵されている先から調査員に「これが本物の絵金かどうか知りたい」と聞かれることがあったといいます。

「本物」かどうかを確定するための調査ではなかったのですが、「絵金」の真贋に対する人々の興味の強さがよくわかりました。それとはまた別に、一説に贋作事件に巻き込まれて野に下ったという絵金の作品について、その真贋が問われるということは入れ子構造的で不思議な印象も受けました。

芝居絵作品の真贋についてを考える前に、前述のとおり「絵金」の捉え方があります。例えが悪いかもしれませんが、商標名（ブランド名）が一般呼称になっている「ホッチキス」＝「ステープラー」のように「絵金」＝「芝居絵」という捉え方があるとすれば、「芝居絵」は全て「絵金」ということになり、本物・贋物という分け方が当てはまらないともいえます。ともあれ、絵師金蔵が描いた芝居絵を確定するとなると、まだ不明な点が多く、時間をかけて筆致や絵具、紙など十分な比較検討が必要とされるものです。

今回、調査された芝居絵を全体的に眺めると、大きく二通りに分けることができます。一つは従来より絵金と伝えられている作品とその筆に倣った作品群、一つはそれぞれの絵師の画風が特徴的なもの。後者の絵師として名前と作品が一致して伝わっているものでは、芝居絵屏風では河田小龍・野口左厳、板絵馬に描かれた芝居絵では恒石徳治・吉川半蔵、芝居絵以外のものでは絵馬と画軸に彼末提馬の作品が調査されました。ほかに文献等の資料から芝居絵を描いた、又は絵金に師事したと伝えられる絵師は二十名弱記録されていますが、絵師と作品の一致は絵金の作品同様、今後の研究が待たれるところです。

図太平記実録代忠臣蔵

安芸市　東八幡宮

土佐の芝居絵に関しての検討は、今後も続けていかなければならないことですが、今秋十一月から約一カ月間、高知県立美術館では、「絵金展―土佐の芝居絵と絵師金蔵」と題した展覧会を予定しています。広義の意味で「絵金」を冠し、この調査により明らかになった土佐の芝居絵の幅広い展開を見ていただき、また可能な限り絵師金蔵の画業を紹介するべく準備を進めております。

さて、県下の所蔵先では、大変なご理解とご協力とを得て時間を割いていただき調査をすることができました。調査の中では、夏の祭礼にもお邪魔し、あわせて祭礼の形態の調査もさせていただきました。大半を調査員としてまわった高橋恵子氏は、所蔵者の方々の日頃の配慮や祭礼での展示後の保存について、細心の心配りをもって行われている様子をうかがい、また、作品の状態を心配されているということを感じたと話していました。

展覧会のカタログに掲載するために今年行われる祭礼の写真の撮影に県下をまわりましたが、それぞれの場所で芝居絵屏風は祭礼の風景として実によくとけこんでみえました。「えんま」と呼ばれる絵馬提灯も町絵師の手から地元の小学生たちの描く漫画やアニメの場面となって祭礼の中に息づいていました。

昭和初期までは芝居絵屏風の制作がされていたということですが、戦後、芝居絵屏風は新たに描かれることなく途絶えています。ある所蔵地区の方からは、その芝居絵屏風の欠けた部分を補彩するのに県下を捜し回ったと聞きました。現在残されている芝居絵の保存とともに、土地の人々が望む限りは、祭礼のなかに芝居絵の展示を続けることも重要な点だと思われます。

春野町芳原　愛宕神社

制作が途絶えてしまっていることで難しいことかもしれませんが、新たな芝居絵屏風の制作が可能になれば、古い芝居絵は条件の一定した保存に適した場所に置き、土地土地の人々が趣向を凝らした芝居絵を楽しむことができるのではないかと、それは、よさこい祭りのように正調から現代的なアレンジまで幅広いものがあってよいのではないかと、あまり現実的でないことを考えたりもしています。

（高知県立美術館学芸員）

①

5.7 ●キャスト発表。2カ月半の基礎訓練後の大きな山場。新たな気持ちで次のステップへ。

②

7.9 ●最初の見せ場「絵金祭の夜には何かが起こる」の振り付け。なかなかステップが覚えられない。

公演間近にせまる

市民ミュージカル「絵金」

大家　賢三

ミュージカル「絵金」は、「ミュージカルRYOMA」「ミュージカル津野山物語」につづき、高知市文化振興事業団が制作する市民参加による創作ミュージカルの第三弾です。これは地元高知の題材をもとに、高知県内で活躍している舞台・芸術関係の方々を制作スタッフとして、創造的な舞台芸術を創りあげようという企画です。土佐の物語を通して、自分たちが暮らす高知を見直すとともに、文化の継承を図っていこうという狙いもあり、参加者・スタッフを含めて幅広い人的交流を生み出しつつあります。

この企画は昨年から進んでおり（脚本執筆・音楽制作）、今年一月から二月にかけてのミュージカル・スクール（全五回）とオーディションの開催を経て、八カ月にわたる厳しい訓練を経た男女八十八人が舞台に立つ予定です。

物語は幕末の絵師・金蔵、通称「絵金」が現代に呼び戻され、謎の女性・式子に助けられながら、現在・過去・未来を遍歴し、自分は何者であるのかを深っていくというストーリーです。

高校生から六十歳までの参加者のほとんどは舞台経験がないものの、「何かにチャレンジしたい」「違う自分を発見したい」という人が多く、学校や仕事を終えて毎週二回の正規レッスンのほか、土曜・日曜に行う特別レッスンにも参加してダンス・歌唱・演技の技術に磨きをかけています。これから本番に向けて、衣裳製作・道具製作などの作業が加わってきますが、持ち前のパワーで必ず乗り切ってくれるものと信じています。

⑤

7.25 ●歌唱指導は川田弘人さん。『死にゆくものは幸せ』を初めて練習。音取りの難しさに四苦八苦。

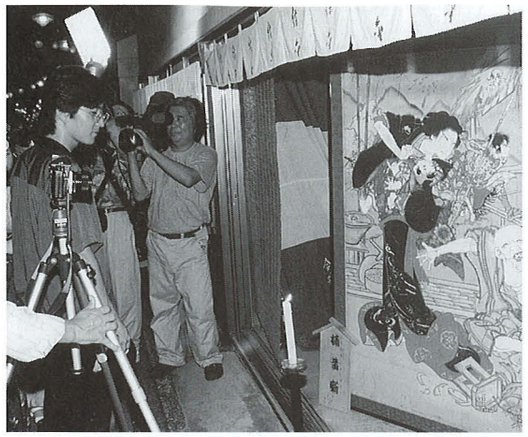
⑥

7.25 ●演出の帆足寿夫さんの演技レッスン。口が開かない者、目に表情のない者は厳しく注意される。

③

7.14 ●高知出身のヴォイストレーナー、西村入道さんによる特訓。ステップを踏み歌うコツを掴む。

④



7.20 ●赤岡町・絵金まつりの見学。宵闇に浮かび上がる原色の芝居絵に、絵師・金蔵の心情を探る。

6.4 ●國友須賀さんによる最初の振り付け。ミュージカルナンバー25曲中、ダンスナンバーは14曲。1曲仕上がるごとに、出演者の目の色も変わっていく。

心情を絵金に託して演ずる「現代の絵金たち」の、〝新しい土佐の物語〟をぜひこの機会にご覧ください。

（㈶高知市文化振興事業団・ミュージカル「絵金」制作担当）

⑦

7.29 ●左から絵金の妻、絵金、謎の女性・式子(しゅくじ)と作曲の渡辺浩さん。歌唱特訓は頻繁に行われる。

⑧

8.11 ●よさこい祭りへ参加。個性的な踊りは注目を集め公演のＰＲに。練習はさらに厳しさを増す。

カーネギーホール公演

橋本　憲佳

今春の三月二十六日、ニューヨーク市のカーネギーホールで、市の「教育プログラム」の一環である「カーネギーホール・チャリティー・フェスティバル」が盛大に開催されました。

これは、同ホールと、ニューヨーク市教育委員会の共催で実施されたもので、その目的は、同ホールが行っている「青少年のための音楽教育」と、教育委員会が数年前から行ってきている「日本語教育と日本文化紹介」のためのもので、市は毎年数名の青年を日本に派遣して日本語の習得や日本文化の研究に当たらせており、同時に国内では広く日本の芸術文化全般を紹介して、一般市民に日本についての理解と関心とを深めてもらおうということで企画されたものです。

この企画に賛同した日本国内の主な文化団体がカーネギーに出演し、その入場料を全額このプログラムの基金として寄与することによって、我々自身もまた、日本人の奉仕活動と国際理解に尽くしているのだということを多くのアメリカ市民に理解して貰うことができるという、両者にとってのビッグ・イベントです。

今回、私どもフラワーソングクラブが出演することになったのは、今日まで数多く実施してきたこの種の海外公演の実績が高く評価されたことと、特に今回は企画者側からの強い要請があったからであり、私どもも、たまたま、今年でちょうど合唱団発足以来満五十年という記念すべき節目の年でもあり、我々にとっては二度とない機会と受けとめ、望んでもかなわない、まさに「夢の音楽の殿堂・カーネギーホール」での演奏！　そしてこれは、我ども合唱団の創設目的である「奉仕」そのものであり、同時に国際親善にもなるということで、一同、喜んで参加させて頂いた訳です。

申すまでもなく、カーネギーホールはさすがに世界最高の音楽の殿堂にふさわしく、また、座席数が二、八〇〇という大ホールにもかかわらず、ステージ上での歌い易さ、ホールの音響効果（反響）、音楽的環境や設備等々、すべてが完璧でした。それに、今回はクラシックの合唱演奏としては私どもフラワーソングクラブが日本から唯一の出演であり、その重責を考えて長期間にわたって行われた厳しい訓練の成果が十二分に発揮することができた演奏は、団員一同とともに生涯忘れることのできない大きな喜びと感動になりました。

更にまた、翌日は思いもよらず朝早くから、現地のロータリアンの家族から感動の電話があり、「昨晩の演奏の中で、特にアメリカ・ザ・ビューティフル（アメリカの第二国歌として親しまれている、その名の通り大変美しい歌で、私が今回のステージのために新しく女声三部合唱曲として編曲したもの）やヨハン・シュトラウス作曲のワルツ／美しく碧きドナウの演奏に大変感銘を受けた」とのこと。

よく、『音楽に国境なし』と言われていますが、まったくその通り、音楽は言葉の壁を越えて、我々演奏者の思いを「心」から「心」へダイレクトに訴えることができたのです。

このような反響があったということは、わずかなりとも私どもの心が通じたことであり、親善友好の一役をも果たすことができたのだと、団員一同と共に喜びあったことでした。その上また、この度私どもにとって幸せだったことは、前日の歓迎会で、現在世界最高のヴァイオリニストであり、現カーネギーホールの館長でもあるアイザック・スターン氏から直接歓迎の挨拶を頂いたことでした。我々が音楽の神様と仰いでいた氏とお目にかかり、しかも生の声で！　これまた、一生涯忘れ得ぬ貴重な思い出となりました。

かつて、チェロの巨匠、故パブロ・カザルスが国連に招かれて特別演奏を行った際、その終了直後に、いみじくも述べられた言葉、『音楽は世界を救う！』を改めて実感させられたステージでもありました。

（高知大学名誉教授）

フラワーソングクラブのカーネギーホールステージ（1996. 3.26）

■会　場　市民フロア（デンテツターミナルビル５階）
※駐車場はありません。

■定　員　いずれも40人（定員になり次第締め切り）

■受講料　いずれも全４回で1,500円（各回ごとの参加も可。１回400円）

■申し込み方法　電話かハガキ（住所・氏名・電話番号・参加希望日を明記）で事業団まで。

■時間　午後2時～4時

10月９日（水）	薬草をつかってより健康にくらす	講師 寺尾智恵美 氏（漢方のテラオ・薬剤師）
10月16日（水）	ハーブの利用と効用	講師 楠瀬朝子 氏（あっといーず丸福農園）
10月23日（水）	高知のおいしい水	講師 今井嘉彦 氏（高知大学名誉教授）
10月30日（水）	澄んだ空気と森林	講師 塚地俊裕 氏（高知県森林政策課）

高知塾'96 生活セミナー

隣国アジアもっと知ろう

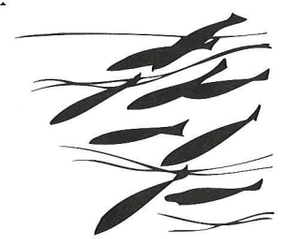
快適生活 自然を生かし

■時間　午後6時30分～8時30分

10月８日（火）	急成長するアジアの国と人々	講師 小林英治 氏（高知大学人文学部教授）
10月15日（火）	高知で学ぶ留学生の現状とその後	講師 市川みどり 氏（㈶日本国際協力センター研修監理員）
10月22日（火）	アジアと高知	講師 起塚昌明 氏（高知県国際交流課）
10月29日（火）	記者のみたアジアの国々	講師 松岡和也 氏（高知新聞社・社会部記者）

「医」の分野でみた良寛（下）

堀内　豊



若いころに良寛は、玉島（岡山県倉敷市）の円通寺で、十二年あまり禅修業をしました。その頃のことを回顧した漢詩に、「僧はよろしく清貧なるべし」と書いています。

清貧――。潔白で節操を守るために、生活をぎりぎりの状態まできりつめて、あらゆることを簡素化して生きることですが、良寛は三十代からほぼ四十年の歳月を、「清貧」に甘んじて暮らしました。

その有様の一端を、食生活でさぐってみようと、良寛がいろんな人から頂いた食料品を前回で挙げましたが、それをみるかぎり惣菜物が主で、あまり肉類を摂っていないことがわかります。要するに良寛は、粗食派です。淡白な食事ですから、まず成人病をひきおこす可能性は過少でしょう。

それに良寛は、（これは後で記しますが）叩歯術の心得がありましたので、食事は、ゆっくり時間をかけてよく噛んでたべたと想像します。

ある専問家の意見によると、よく噛んで食べると、細かく顎の間筋を動かすので、耳穴の近くの血管を刺激することになり、血の巡りがよくなります。で、大脳皮質が刺激されて神経細胞の萎縮を防ぐことになりますので、結果的には老化予防になるそうです。

ところで良寛の身体の特徴を、解良栄重は「良寛禅師奇話」にこう記しています。「――長大ニシテ清癯、隆準ニシテ鳳眼、」と。

つまり、長身で、体はやせてほっそりしていて、鼻は高く、目は大きくつぶらであったようです。そんな容姿の良寛は、五合庵の近くで大根や莢豆などを作り、谷川の水を汲んできたり、薪を、「縄ヲ胯間ニ通シ」（良寛禅師奇話）て担って運んだそうです。

そのような生活を十五年あまり続けた良寛は、六十歳になろうとするころ、（体力のおとろえを感じたのか）国上山麓の、乙子神社の草庵に引っ越しました。その期間はまさに「清貧」の一語に尽きる暮らしぶりでした。

良寛は当時にしては長寿です。長生きの秘訣のひとつに〝托鉢〟が挙げられましょう。

お経を唱えながら、家々を回って布施を乞うときの良寛は、「師音吐朗暢、読経ノ声心耳ニ徹ス。」（良寛禅師奇話）でした。

読経の声は、ほがらかで伸びのびしているから、聞く者の心と耳にしみとおったようです。それは腹から声を出す発声法であったでしょうから、良好に体調を保つのにはきわめて有効でした。

とにかく天気が好いと、托鉢をしながら知人を訪ねましたから、かなり長い距離を歩いています。歩くのは足腰を使いますから、筋力の衰えを防ぐことになったでしょう。

では次に移ります。――良寛ファンの多くの人が、最初に心をひかれたのは、（子供たちと手毬、かくれんぼう、おはじき、若菜摘みなどをして遊んだ話）だそうです。

なんの屈託もなく、気儘に子どもたちと遊んだ良寛さん。ある意味では、それがストレス解消になったかもしれません。ストレスがたまると心身によからぬ影響を与えますので……ま、良寛さん、心身症にかからなくて（まっこと、よろしゅうございました）。

霞たつながき春日を
　　こどもらと
手まりつきつつ
　　この日暮らしつ

この秀歌を口ずさみながら次に移ります。

少年時代の良寛は、〝本の虫〟と言われたほどの読書家でした。長じてから和漢の書物に親しみましたので、「医」に関しては漢方医学の本も味読したと思います。

それに加えて、三十四歳のころ円通寺を退山して、四年あまり諸国を放浪したときに、各地の民間療法や薬草の知識を得たことは容易に想像できます。おそらくやその間に、白隠禅師（良寛は白幽子と呼称）の『夜船閑話』を読んで〝叩歯術〟に触れた漢詩を作ったと推測します。

紙幅が足りませんから、意訳して現代文に書き直してみます。

「あれこれ気を散らして　ものを追うようではいけない。黙って　口もとをしめるがよい。飯をくうのは腹がへってのこと。目がさめたらまず歯を噛み合わすことだ。体内いっぱい　気をはりつめると、どんな邪悪にもつけこまれることはない。私は白幽子（白隠）の説を読んでいくらか養生のコツがわかった」。

叩歯術というのは、毎日カチカチと音を立てて歯を噛みあわせる体操です。『夜船閑話』には、「呼吸法」「内観法」を収めています。おそらく良寛は、こうした秘法をとりいれて、摂生につとめたと思われます。

擱筆にあたってひとこと述べておきます。

銭、金、物質、地位、名誉など、いっさい欲せず、一鉢一衣の、それこそ無一物にちかいくらしをつづけたお人であったからこそ、「長寿」がしぜんと良寛さんに付いてきたではないでしょうか。――

（完）

（高知県地方職業安定審議会委員）

高知市文化振興事業団創立10周年記念出版
土佐自由民権運動日録

土佐自由民権研究会編
B5判・上製本・函入り　496頁
定価 10,000円（税込み）

「国際化」時代の山村・農林業問題
再建への模索・高知県からの報告
高知県緑の環境会議山村研究会
鈴木文熹・依光良三・川田勲・飯国芳明　著
A５判・上製本・288頁　定価2,000円（本体1,942円）

好評につき二刷発売中！
土佐弁　土佐日記

土居重俊監修　B6判・130頁・上製本
高知市文化振興事業団 編　定価 1,300円
紀貫之の名著『土佐日記』を、とさことばでつづるとどうなるか？古典を身近なものにするとともに、土佐弁にも親しめる楽しい本。

好評につき二刷発売中！
高知の森林

高知県緑の環境会議　森林研究会　編
B5変型・228頁　定価 2,500円
高知の代表的な山と森林をつぶさに探訪し、まだ残されている貴重な自然や植生のほか、森林と人々とのかかわりの歴史や、現地への道のり等も紹介。

お稲荷様界隈 1

久武　盛真

私は生ボケで物忘れがひどい。低金利、飴玉年金、高消費税でボケ老人の生活環境は甚だ厳しい。遠からず実印の管理も忘れる植物人間になるでしょう。そうなる前に紙の記念碑によしなしごとを書きましょう。

私の子供の頃は知ったかぶりのお年寄りが大勢いました。老人は衒学趣味をひけらかして、人前で新聞なんかを算盤の読み上げ算みたいな変な節回しで大声で読みました。あの頃の印刷物は総ルビでしたから、無学でも難無く読めたのです。私が文字を覚えたのも父が校長をしていた下知尋常小学校よりも、ルビつきの新聞雑誌のお陰です。

テレビの漢字の読み方ゲームで馥郁が誰も読めない。読めない訳は文部省が教えたがらず本屋がルビを止めたからでしょう。昔はルビなしでは売れないから、本屋は拡販の為にルビをつけざるを得なかったのです。若者の識字能力アップには、ルビ無し本の不買運動をすれば顕著な効果があるでしょう。

私は昔の音読爺さんの歳を越えて、脳味噌に黴がはえました。何を書くやらおぼつかなくて気が引けるが、糸口さえ見つかれば何とか辻褄の合う話になるかも知れません。

私が生まれた常盤町はもとは松が鼻と呼ばれた所で、私の高祖父の久武山城幸麿が、十二代藩主山内豊資の命令で天保元年から四年がかりで大阪堀江の土佐稲荷をご勧請した所です。今のお稲荷さんは戦後にお宮の株を譲り受けた篤志家が復興しました。私は一九一五年に境内で生まれた狐の申し子です。

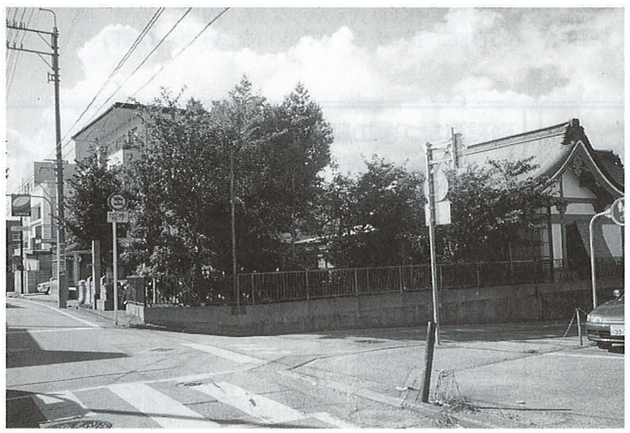
岡林清水先生の『高知県文学散歩』（高知市文化振興事業団刊）の九十頁に、

「高知の松が鼻、番所を西へ行く、農人町、菜園場、新堀、魚の棚、紺屋町、種崎町うちこえて、京町行くとはや会所が建っている。程なく使者屋を打ち越して、堺町、本町八丁通します。そこらで桝形、本丁つきぬけ観音堂」と楽譜はカットで歌詞だけ載っています。私はこの歌詞を知りませんでした。流石に岡林先生は何でもご存じです。

松が鼻には元は松の防風林がありました。その写真は図書館にある筈ですが、明治八年に堀川の北岸を埋め立てて、家禄奉還人に退職金替わりに与えたどさくさに伐られたとかで、常盤町西詰の水上署の構内と、東詰のお稲荷さんの境内に一本ずつありましたが、大正八年に枯れて径一メートルの伐り株を残しました。その伐り株に灰色の味のよい茸が生えて、それをカラマツタケと呼びました。得体の知れない茸を決死の覚悟で食う勇気を褒めるべきか、それ程迄にひもじかったのかと推察すべきか、判断の資料はありません。

常盤町とか緑町など松が鼻の縁語で名付けたのは私の高祖父だと聞きました。

知寄川を血寄川と書いていた訳は、新堀との分岐点に牢獄があって、処刑の血が川を染めたからだそうですが、川の色が変わる程死刑が多かったとは思えません。



現在の土佐稲荷神社周辺

下知は宝永堤以西が上知寄、東は下知寄と言っていたのを、上知寄は北から鉄砲町、北新町、中新町、南新町、田淵と称して軽輩の居住区になり、上知寄と誰もが言わなくなると、下知寄も下知につづめたと古老に聞きました。しかし今は自治省の意向に従順な市役所の職員さんが、郷土史研究家に恨まれながら住居表示を変えたので、今は若松町だけが昔の名残を留めています。土地の呼称はそれなりのいわれがあるので、由来を知らずに勝手に変えてはいけません。

お稲荷さんは本殿と拝殿を回廊でつないだ本格的な神社建築で、欅の宮柱太しく建て、千木高しりて、藩主から社禄を受ける格式の高いこけら葺きのお宮でした。

藩籍奉還後社禄を失ってもどうにか維持できたのは、宮大工の腕がよくて小粒ながら外観が立派だったからでしょうか。

奥へ長い窮屈な我が家は社殿の西隣にありました。その鰻の寝床式の家に祖母と父母と叔母と兄と私の六人が住んでいました。

明治15年頃の松が鼻（寺田正写真文庫・高知市民図書館蔵）

私の生まれる前はその西隣にチャントした我が家があって、その家には家族用の他にお殿様用の二畳敷きのトイレがあり、便器と蓋に漆で蒔絵がしてあったそうです。毎年八月二日の夏祭りには籾殻を便槽に敷き詰めてお殿様をお迎えしたと曾祖母が言っていたと、十歳年上の叔母に聞きました。

その家には営林署の中川さん夫婦と一人娘の長子ちゃんが住んでいました。

我が家が自宅諸共家作をなくしたのは、日露戦争後のインフレ時に、断り下手の祖父が近所の医者に泣き落とされて請け判を押したのがいけなかったそうです。

今見ると狭い境内ですが、子供には大きく感じられました。鳥居の右側に大きな銀杏があって、鳩程の黒い渡り鳥の大群が来てギャアギャアとうるさく啼きました。カラトリと呼んで夏の景物でしたが今は居ません。

昔はビザの発行条件が厳しくて領外とは絶交同然ですから、川一つ渡り、山一つ越えれば名詞はまちまちで、領民は勝手に命名したものです。茸でも鳥でも得体の知れない物には、博物学とは関係なく頭に（カラ）をくっ付けて間に合わせたようです。

水っぽくて燃えにくい銀杏の葉は、良寛が「焚くほどは風が持て来る落ち葉かな」と言う様にもいかず、掃除担当の叔母は文句たらたらで落ち葉も犬の糞も前を流れる堀川へ捨てました。沈むものは沈み、浮くものは漂います。我が国は昔から川へ流せば三尺流れて水清しで、鼠や猫や犬の死骸や七夕の竹などありとあらゆる物を川へ捨てました。

すると国つ神が高山の末低山の末から天の八重雲を科戸の風で吹き払い、瀬織津姫と速開都姫と息吹戸主とが跳ねかけ合いをして最後に速佐須良姫が、一切無償で終末処理するのが神道古来の伝統的常識です。歳若い叔母は平然と日本式に川へ捨てました。その精神的風土は今も健在です。

（泉文芸主宰）

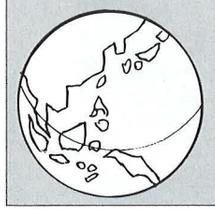
ズームアップ

東南アジア

（6）

アジアを知ろう

小林英治



私の学生が尋ねる。「東南アジアのどの国が興味深いですか」「全部です。どこかまず行って、若者たちと話してごらんなさい。興味が沸いてきますよ」と私は答えることにしている。東南アジアの国々はいずれも日本から三時間ないし五時間くらいの空の旅で到達することが出来る近いところにある。

現地で受ける印象は強烈で、一生懸命に勉強する学生たち、開発のために働く人々の熱気が、カルチャー・ショックとともに感じられ、若者たちにとって貴重な体験となろう。東南アジアの人々の笑顔やおいしい熱帯の果物、咲き誇る花々なども忘れ難いに違いない。

近頃はテレビの映像がアジア各地の人々の様子を茶の間に運んできてくれる。私はビデオにとって授業に活用しているが、ある学生はアジアの国で都会と農村の人々の服装が違うのに驚きましたという。そういえば今日のわが国では都会と田舎の生活の違いがなくなり、田舎においても都会並みの生活が営める。

東南アジアでは農村の人たちの都会へのあこがれが強く、職を求めて、親類を頼って、あるいは勉学のために都市に押し寄せてくる。このためバンコクでも、ジャカルタでも、マニラでも首都圏は膨れ上がる一方で、人口集中が都市の悩みの種となっている。市当局は住民に電気、水道、学校といったサービスを提供するのに追われる。一方田舎から出て来た人たちのなかには、スラムで最低限の生活を強いられている住民も数多い。「ストリート・チルドレン」と呼ばれる貧しい子ども達は、路上に暮らし、物乞いやタバコ・新聞売りなどをして親を助ける。発展の影に取り残された人たちである。

最近アジアの国々に関する図書が数多く出版されるようになった（写真）。これらを読んで、私たちの隣国についての理解を深めることを勧めたい。

入門書的なものをいくつか紹介しよう。陸培春『もっと知ろうアジア』（岩波ジュニア新書、一九九五年）。著者はわが国に長く住むマレーシアのジャーナリストで、日本での経験をもとにアジアの国のことをやさしく説く。河部利夫『世界の歴史　東南アジア』（河出書房新社、一九九〇年）。東南アジアの歴史が手軽に読める文庫である。『ベーシックアジア経済入門』（日経文庫、一九九三年）。中国やＮＩＥＳの国々、アセアンなど発展する国々の現状が伝わってくる。上智大学アジア文化研究所編『入門東南アジア研究』（めこん、一九九二年）。歴史、社会と文化、政治と経済、日本とのかかわりなどがやや詳しく紹介されている。

もうひとつユニークな参考書として『アジアの人びとを知る本』（大月書店、一九九二年）が出ている。これは全部で五冊からなり、環境破壊とたたかう人びと以下、新しい文化をつくる人びと、働く人びと、支配する人びと、アジアで生きる人びとが語られる。

国の歴史や文化をもっと深く理解するために、アジアの言語を学ぶことは有意義なことである。タイ語、タガログ語、インドネシア語などの入門書や辞書も充実してきた。

私たちの回りには中国や韓国、東南アジアからの留学生の数が多くなった。彼らは与えられた日本での留学の機会を生かすべく勉学に励んでいる。彼らを通じて隣の国の人々をもっと知ることも、長い目で見て友好に役立つことだろう。（完）

（高知大学人文学部教授）

第12回写真コンテスト・高知を撮る入賞作品

高知を撮る

筏の浮かぶ江の口川

清岡　義道

「おとこの武士のさむらいが、うまからおちて落馬して、おんなの婦人にわらわれて、はらかききって切腹す」

小学生のころ大声で興じた戯れ歌の一つ。〈やまとことば〉と〈漢語〉の同義語を、七五調のリズムにのせて反復する口あそび。

綿谷雪著『言語遊戯の系譜』によると、このように同義語を重ねるのを〈重言〉または〈重語〉といい、古くは『源氏物語』などにも用例が見られる由。私たちの日常語の中にも、「豌豆まめ」、「昼ひなか」など、無意識に使っている重語がある。

私に少年時代のことば遊びの記憶を甦らせてくれたのは、谷沢永一氏の『人間通』に散見される和訓ルビの付いた漢語。

無能、伝説、真実の、虚喝、露骨、雀躍、齟齬……

同書は「世の姿と人の心」をめぐる「わずか六百字に凝縮された九十余の賢察」。

これらの漢語と和訓は絶妙のコンビを組んで、著者一流のエスプリのきいた短章に、風趣を添える薬味となっている。

私ども昭和一桁世代は、子供の頃、おとなの本の漢字に振ってあるルビによって、漢語の読み方と意味を覚え、ときにはオトナの世界の艶事を垣間見て、胸をドキドキさせたものであった。

六月に行われた「日本漢字能力検定」の受験者は、過去最高の約二十九万人に達し、平均年齢一八・七歳の老若男女が、「騒擾」、「尾鰭」などの読み書きに挑戦したという。

「騒じょう」、「めい福」のように漢語の表意性を半殺しにする似非漢語を日頃苦苦しく思っている筆者などは、まことに慶賀すべき傾向であると思っている。

（朴）

ルビ

振り　仮名

風俗歳時記

劇団旗揚げ公演を目指して

中谷　潔一

去年の暮れ、かつての演劇仲間が集まり、何か面白いものを演ろうという話になり演劇グループを結成しました。現在二十四歳から五十四歳の会員が集まっています。

土（自然）に育くまれた中での人間臭さを描く芝居が出来ればとの想いで、演劇グループ土筆（つくし）と命名しました。

和を大切にし全員参加の会議を持ち、個人を尊重し伸ばしていくと同時に、企画、会計、宣伝など役割を明確化して責任転嫁のない体制をつくり、お互いが楽しめる芝居づくりをしていきたい。そして新人養成や他の劇団との交流も活発に進めていきたいと思っています。

公演日は来年の六月十二日㈭と決定し、制作、演出、大道具、小道具、衣裳、そして照明等、スタッフも決まり配役も決まった中で、九月より今年一杯は本読みを中心に役をねりあげ、役の心をつかむ努力をし、来年早々には立ちげいこに入る予定です。

ひとつの芝居を創り出す楽しさを一諸に味わってみたい方、募集中です。

今、ここに生まれたばかりの土筆（つくし）を、貴方も一諸に成長させてみませんか。

連絡先　高知市朝倉己一七五
演劇グループ土筆
電　話　〇八八八－四三－〇二〇一

本の埋葬式

片岡千歳

高島さんとは、私は二十代のはじめに神戸で出会った。高島さんは四十代半ばで、「月曜日詩会」を主宰し「月曜日」という雑誌を発行していた。

子育てもおわり近くなって詩を書きはじめ、「花形株」「パセリと埋葬式」二冊の詩集を刊している。

語彙が磨かれていて、ハッとさせる詩だ。

「月曜詩会」のことは、神戸新聞の会の案内欄かなにかで知って、私は仲間に入れて頂いたのだった。

初めてその会で高島さんにお会いしたとき、自分の母親のような人が、詩の会の中心にいて、しかも書かれている詩の若々しさに驚いた。

私はそれまで、ひとりで詩のようなものを書いていたが、それは恥すかしいことだと思っていた。世の詩人とは、いつも失恋ばかりしている人種だとその頃の私は思っていたからだった。

「月曜詩会」で立派な大人が、小間切れのような詩を書く小娘にでも、対等に付き合って下さって、杉山先生にいたっては、生意気な小娘の私をも、淑女として遇して下さった。それは、詩を書く、又は学ぶことで養われるものかも知れない。と私には感じられた。

その後私は結婚して、高知に住み、ブランクはあったが、付き合いは四十年にならんとしている。

阪神大震災のあった昨年、十二月思いがけないことで、高島さんにお会いできた。

二十数年ぶりだった。「ようこそ」と言わんばかりに、小走りで門を開けてくださった。いつお訪ねしてもこんなだったと、私は思わずお互いの若かった頃が思い出され、涙が溢れた。

震災で痛んだ壁を、補修したあとが、生々しく残されているお部屋で、高島さんは、詩集や詩の幾種類かの同人誌などを、K学院に寄贈したとおっしゃった。

「詩の親しい仲間に、欲しい本は差し上げて後は全部K学院の図書館に寄贈しました。詩集はともかく、同人誌はこんなに揃ったのは貴重だと喜んで頂きました。」

「寂しくはありませんか」と愚かな質問をしようとして、その晴々とした高島さんの表情に、急遽、私は言葉を替えた。

「高島さんらしい本の埋葬式ですね」

高島さんは、今年八十五歳のはずである。

（古書店経営）

■ 新刊 ■

清流を子らへ
――21世紀に残したい鏡川――

高知河川環境研究会編　A5判・並製本122頁・定価1,030円

時代とともに急速にその姿をかえる鏡川。その変貌ぶりを憂い、何とか清流を復活させ次代の子どもたちに残したいと研究会メンバーがおくる熱いメッセージ。

※市内主要書店、又は当事業団でお求め下さい。

散歩の途中で

いつ頃築造された土塀だろうか。焼台や土柱（ツク）などの窯道具と、窯壁に使われていた耐火レンガが、横並びに丁寧に埋め込まれている。その隙間は白漆喰で、これまた丁寧に塗り込められている。

落ちついた色合いが美しい。廃窯材の再利用といってしまえば簡単だが、施主の窯に対する愛着が偲ばれる。能茶山の麓の一角。

風伯

無音の音

漫画のコマに使われる〝シーン〟というオノマトペは、音の無い状態を音で表現する画期的な発明といわれ、手塚治虫氏、石ノ森章太郎氏両者の発明説があるようだ。医師でもあった手塚氏は静寂でこそ聞くことのできる聴神経の音から、一方、石ノ森氏は作品「龍神沼」の一コマで無音状態を表す試みをしたという。

発明者の特定は次の機会に譲るとして、さて、シーンという音であるが、時々体験した記憶はある。

春、木の芽起こしといわれる雨の後、筍（たけのこ）や虎杖（いたどり）の成長の早さに驚かされるが、その時期、特に雑木林に立つと山全体がシーンと鳴っている。一斉に木の芽が吹く音だろうと思う。

今一つシーンを聞けるのは蚕室での蚕の桑を食む音だ。木々も蚕も個々では容易に聞き取れぬが、何れも一斉となると静寂の中に音が生まれてくる。

声無き声に耳を傾けることが重要だと説いた政治家がいたが、今それを一斉に音にしたらどう聞こえてくるのだろう。

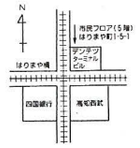
インドネシアではドゥクンと呼ばれる祈禱師や占い師が政治にも影響力を持っているという。これも聞こえぬ音を探ろうとする試みだろう。我が国では祈禱師に頼ることは無いだろうが、聞く努力より世間の気受けばかりの脈絡のない理論が多い。

やはり、今の政治家は〝ドシーン〟という音が一番気になるらしい。

（かむ）

市民フロアのご利用を
展示や会議に最適！

広さ・内装　96㎡壁面布クロス張り、スポットライト完備
所　在　地　高知市はりまや町一－五－一
デンテツターミナルビル5F



お申し込み
(財)高知市文化振興事業団
☎73－4365

熱いぞ！俺を今に呼び戻して、土佐の若い衆が燃えよるぞ。

ミュージカル 粉金

[MUSICAL EKIN]

[高知市文化振興事業団市民ミュージカル第3弾]高知県立県民文化ホール開館9周年記念公演／女性誌46回電知・芸術賞参加事業

平成8年11月3日[日]・4日[月(祝)]高知県立県民文化ホール・オレンジ

開演＝3日PM6:00・4日PM12:30／PM6:00・開場三十分前 チケット＝[前売り]2,500円[当日]3,000円・税込・全自指定

チケット発売＝高知県立県民文化ホール・高新プレイガイド・チケットぴあ・チケットセゾン・高知蔦屋・県立美術館ミュージアムショップ・高知市文化振興事業団 ■託児室有り[要申込み]

●作・作詞・演出 帆足寿夫 ●振付 國友須賀 ●作曲 渡辺 浩・長谷川靖・西本知代・近森真哉 ●歌唱指導 川田弘人 ●編曲 鎌倉久也 ●舞台美術 増田和剛 ●照明 明神慶福 ●衣装 山本正子 ●ヘアー&メイクアップ 公文 慶 ●舞台監督 和田年美 ●音響 豊永雅男 ●ヴォイストレーナー 西村入道・西村八重子 ●ダンス指導 スガ・ジャズダンス・スタジオ ●演技指導 帆足由美 ●歌唱指導協力 坪内一郎・岡村ふみ ●制作 大家賢三・田内 健 ●題字 福原云外

【主催】(財)高知市文化振興事業団・高知県立県民文化ホール
【後援】高知県・高知県教育委員会・高知市・高知市教育委員会・高知市文化推進協議会・高知新聞社・RKC高知放送・NHK高知放送局
KUTVテレビ高知・高知ケーブルテレビ・エフエム高知・朝日新聞社高知支局・毎日新聞社高知支局・読売新聞社高知支局
【協力】高知県赤岡町【写真協力】赤岡町本町二区【助成】財団法人地域創造助成事業・ジャンボ宝くじ助成事業

●お問い合わせ(財)高知市文化振興事業団 0888-73-4365

財団法人 高知市文化振興事業団 〒780 高知市本町5丁目2番3号 TEL(0888)73-4365 郵便振替01680-5-14869